会報「人間科学」

No.1(2023)

特集：全国人間科学ネットワーク設立記念
公開シンポジウム「つながれ人間科学」
（2022 年 12 月 4 日）

・全国人間科学系部局連携ネットワーク設立の辞
・リレートーク
・人間科学宣言

全国人間科学系部局連携ネットワーク

全国人間科学系部局連携ネットワーク参加校
（28 大学、順不同）

尚絅学院大学
筑波大学
武蔵野大学
東京都市大学
早稲田大学
専修大学
金沢星稜大学
立命館大学
大阪大学
大阪経済大学
神戸女学院大学
神戸大学
九州女子大学
西南学院大学
東北文教大学
常磐大学
帝京科学大学
文教大学
田園調布学園大学
東洋英和女学院大学
愛知みずほ大学
大阪国際大学
大阪人間科学大学
帝塚山学院大学
神戸松蔭女子学院大学
島根大学
筑紫女学園大学
九州産業大学

目次

特集：全国人間科学ネットワーク設立記念公開シンポジウム

「つながれ人間科学」

全国人間科学系部局連携ネットワーク設立の辞　大阪大学 渥美公秀 ････2

リレートーク

・人間科学を考える　文教大学 神田信彦 ････････････････････････････････3

・人間科学ネットワークへの期待：人間を多角的視点から理解し，世界の持続的発展に貢献する　早稲田大学 三嶋博之 ････････････････････････････････････6

・「わたしたちの人間科学」現代に必要とされる人間科学的思考　専修大学 嶋根克己 ･･･9

・大学で人間科学を学ぶということ　武蔵野大学 辻 惠介 ･･････････････････････12

・島根大学人間科学部での学び　島根大学 磯村 実 ･･････････････････････････18

人間科学宣言 ･･･20

話題：大阪大学人間科学部創立 50 周年記念
2022 人間科学サミット in OSAKA
「あつまれ、ひろがれ、人間科学」（2022.12.3-4）･････21

情報：フォーラム人間科学を開催します ･･････････････････････････22

編集後記 ･･･23

特集：全国人間科学ネットワーク設立記念

公開シンポジウム「つながれ人間科学」

「全国人間科学系部局連携ネットワーク設立の辞」

大阪大学大学院人間科学研究科

渥美公秀

全国人間科学系部局連携ネットワークは、人間科学の研究・教育・実践を担う全国の大学部局が連携し活動していく場です。全国で初めて人間科学という名を冠した部局として設置された大阪大学人間科学部の 50 周年記念式典の会場に全国 16 大学の部局長が参集し、「人間科学宣言」を採択しました。全国人間科学系部局連携ネットワークは、「人間科学宣言」の精神にのっとり、人間科学の発展を目指して様々な研究・教育・実践活動を展開していきます。

「リレートーク」

人間科学を考える

文教大学人間科学部　神田信彦

はじめに

「人間科学」という言葉は多くの人にとって興味深く魅力的な印象を与えるのではなからろうか。一方でその実体が定かではなく、語る人、それを受け取る人によって意味するところがくいちがうこともあるだろう。そこで拙稿では「人間科学」について試論の提示を行い、さらなる議論の進展のきっかけとなることを期待したい。

人間科学とは

人間科学とは何かについて未だ確定した考え方はないといえるだろう。最低限の共通認識として同意を得ることができそうなことは、人間科学が対象とするのは、「人間や人間の営み」ということであるだろう。ここでの「人間」とは、文化を営む人間という限定をつけることもできる。もちろん生物的存在としての人間（ヒト）までを含めることを主張することもできる。この場合、心理学、社会学、教育学、文化人類学は言うに及ばず、精神医学、言語学、経済学や哲学、そのほか自然科学以外の多くの学問領域が含まれることになろう。さらに生物的存在としてのヒトまでを含めると脳神経科学や遺伝子生物学などの分野も含まれることになろう。

しかし、問題は「科学」をどう捉えるかによって人間科学の領域が、上に述べたような極めて広範なものになる場合から、研究に際しどのようなデータを扱い、どのような方法で分析を行うかなどさまざまを考慮する傘をかぶせると、傘の大きさは次第に小さくなり、人間科学とされる領域は順次限定されてしまうだろう。

そう考えると、現段階では「人間科学とは、人間やその営みを研究対象とする学問領域の総称であるが、科学に対する考え方により、広範な領域となる場合から極めてわずかな領域だけを含む場合まで幾つかの可能性を考えられる」というところであろうか。

ここまでの考え方は、人間科学を人文科学や社会科学などと同じようにある範囲の学問領域の上位概念と位置づけたことになる。欲張らずにこれでもよいのかもしれないが、もう少し積極的に人間科学を考えてみたい。

人間科学的な視点

人間科学部や人間科学科で学生たちは、人間科学の諸領域の授業を受け、それぞれの領域の知見を学ぶ。知識だけではなく、それぞれの学問領域が人間やその営みをどのような枠組みでとらえているのか、言い換えればそれぞれの領域の視点を理解し身につけることが必要であることを筆者は学生たちに伝えるようにしている。

自分が中心に据えている学問領域を信頼し誇りを持つことはとても大事であるが、その一方でそれにも限界があることを理解しておくことも必要である。それを補ってくれるのが人間科学を構成する他の諸領域の視点である。言い換えれば「人間やその営みを理解する視点は一つではない。他の諸領域の視点を合わせもつことによって、単一の視点では見落とされるものを補い、さらに新しい発想を持つ可能性が生まれる」のである。

したがって人間科学に含まれる諸領域は単に同じ傘の下にあるだけではなく相補的な関係にあると言えよう。このことは人間科学のさらなる可能性を示しているように思われる。

人間科学の方法は

それは人間科学の独自の研究方法あるいは研究スタイルを作ることである。しかし新たな研究方法を確立することはたいへん難しいと考えられる。そこでここでは研究スタイルについてその可能性を検討してみたい。

例えば、あるテーマについて自らの専門領域の視点や研究成果だけではなく、人間科学を構成する他の諸領域の視点や研究成果を結びつけ総合することにより、これに関わるモデルや理論を提案することが考えられるのではないだろうか。「不登校」をテーマとして考えてみよう。具体的には、私の専門は心理学であるが、これに加え社会学、教育学、脳神経科学や社会福祉学などの視点や知見を結びつけることにより、それぞれの弱点を補強し合い、不登校の理解だけでなく防止や改善のためのモデルを提案することができるであろう。これが異なる領域の複数の研究者によって行われるとすると「学際的研究」の枠組みとしても理解されることになろう。

終わりに

人間科学を関連諸領域の上位概念として位置づけ満足してしまうのはたいへん残念である。拙稿では試論としての人間科学を述べてきたが、今後、全国人間科学系部局連携ネットワーク各位におかれては、人間科学について議論を深め揺るぎない人間科学の確立を目指していただきたい。

人間科学ネットワークへの期待：
人間を多角的視点から理解し，
世界の持続的発展に貢献する

早稲田大学人間科学学術院　三嶋 博之

1882 年に大隈重信によって創立された早稲田大学は，1982 年の 100 周年を迎えるにあたり，その記念事業として新キャンパス・新学部の設立を計画しました。しかしこの構想の萌芽は，日本最初の人間科学部である大阪大学人間科学部が設立された 1972 年頃に芽生えたとされています。その当時の新学部設立に関する趣意書には次のように書かれています（廣木, 2021）。

「現代社会には、科学技術の急速な発達と社会・産業構造の激変の結果として、実にさまざまな問題が発生してきている。このような現状において、また、かかる現状を打開していくために、人間の生理・心理・社会環境を組織的・統一的に把握することが必要である。新学部設立の趣旨は、混迷を続けている現代社会の諸問題を分析し、これを解決していくための方途を提示しうる『人間の科学』の確立を構想し、そのもとにおいて、教育・研究活動を行おうとする点にある。」

この構想の具体化にはその後およそ 15 年の歳月を要しましたが，学内での慎重な議論を経て，ついに 1987 年 4 月に，早稲田大学は新学部として人間科学部を埼玉県所沢市の新キャンパスに設立するに至ります。当時の総長であった西原春男は，人間科学部の開校式式辞において，人間科学部の理念を次のように語りました（廣木, 2021）。

「人間は精神と肉体とからなる存在ですし、その精神も例えば知、情、意というようないろいろな異なる知能に分れているのでございます。しかし、本来人間はそういった精神と肉体とからなる全一体としての存在である。しかもそればかりではなく、胎児として発生してから死に至るまで生物的存在でありながら自然環境、社会環境とふれあいながら発達をしていく動的存在でもある人間を、今一度全一体として体系的、総合的に把握するという観点が必要になってきたのではないだろうか」

すなわち，早稲田大学人間科学部は，1)人間を多元的でかつ全一的な存在と見做し，2)それを生物的，自然的，社会的，心理的環境と相互作用しながら発達する動的存在として体系的・総合的に把握することが期待されて設立された，と解釈できると考えられます。これは，人間性の本質を尊重しつつ科学的な探究を進め，社会に貢献することの決意であるとも読み取れます。

そして，これらの理念は，同じ時代背景を共有して全国に設立された人間科学部でも本質的に共通するものであると推察されます。日本における人間科学の黎明期から現在に視点をもどせば，科学技術，産業構造，社会，生活様式，情報伝達の速度，自然環境，個人の意識の変化は更に著しく，またそれぞれ極度に細分化され，「人間の人間らしい部分」がますます縮小しているように感じられます。今一度私たち人間が，生物，社会，文化，心理，身体，物質，経済，歴史，表象，知識，言語，情報等からなる多次元的な側面を持ちつつもそれらが統合された全一体であることを確認し，それを体系的・総合的に扱うことができる人間科学を，ますます発展させる必要がある時代に直面しています。

個人の力は限られており，また一つの組織の力にも限界があります。しかしながら，今回，全国の人間科学系部局のネットワークが設立されるにあたって行われたアンケート調査では，全国の人間科学系部局の総定員数はおよそ１万人弱，今日の大学進学者のおよそ 1.7%となっており，これらが結集すれば大きな力となるはずです。たとえば，ある学部では用意されていない専門領域が他の学部には存在し，またそれぞれの学部にはそれぞれの独自の研究フィールドがあり，これらが相互に連携できれば学術的な多様性とその深化はさらに拡大すると考えられます。

多元性が全一的に個として内包されている存在である人間を探究するためには，多角的な視点が不可欠です。その多角的な視点をさらに豊富化する可能性が人間科学のネットワークには存在すると考えられ，このたび設立されたネットワークが，人間と，人間以外のすべての存在の調和と均衡，そして幸福と持続的な発展を推進する力となることを強く期待します。

引用文献

全国人間科学系部局連携ネットワーク事務局 (2022). 全国人間科学系部局連携ネットワーク アンケート調査報告書：Human Sciences at a Glance 2022 大阪大学人間科学部・人間科学研究科

廣木 尚 (2021). 幻の新学部【第 3 回】人間環境学部：人間科学部を結実させた新領域の「芽」, 早稲田ウィークリー, https://www.waseda.jp/inst/weekly/news/2021/01/14/82345/

「わたしたちの人間科学」

現代に必要とされる人間科学的思考

専修大学人間科学部　嶋根克己

本稿の執筆依頼を受けて、あらためて養老孟司による『人間科学』という著作を手に取った。専修大学に新学部を設置する際に、「人間科学部」がもっとも有力な名称として浮上したが、新学部設置委員会は「人間科学」にかんするグランウンドイメージがつかめずにいた。そこで筆者が手掛かりの一つとして参考にしたのが『人間科学』であった。

冒頭には次のように記されている。「いくつかの著名な大学に、人間科学ないしはそれに類似した名称がついた学部がある。ではその正体がなにかというなら、統一された学ではなく、複数分野の専門家の集合というのが実情であろう。」同書の出版から約 20 年が経過した現在、同氏の指摘した「人間科学」はどのように変化したのだろうか。専修大学人間科学部の設立の経緯を振り返りながら、人間科学に関する私見を述べてみたい。

先に発表された「全国人間科学系部局連携ネットワークアンケート調査報告書」によれば、2000 年を境として人間科学系の部局の設置スピードが増加している。養老孟司氏が「人間科学部は複数の専門家の集合にすぎない」と断じた時期とちょうど一致する。

専修大学の人間科学部の設置においては、すでに４０年以上の歴史を有していた文学部から心理学科と人文学科社会学専攻を抽出して、二学科体制で新学部を発足させることが決定していた。「人間科学部」はその名称のひとつとして提案されたものである。両学科とも文学部人文学科の一角を成していたので、「人間科学」（Human Sciences）という名称は違和感なく受け入れられた。

本学人間科学部設置時には、心理学科と社会学科という専門性の高い学問領域を統合して、どのような学部アイデンティティを作り出すかが焦点となった。そこで合意されたのが「徹底的な少人数教育を通して実証性を重んじる」というビジョンであった。下斗米淳現学部長は「人間科学部の究極の目的は、人間の存在とはいかなるものかを見いだしていくことです。それは極めて人文社会学的な伝統の上に成り立っていますが、一方で、厳密な実証性を貫くために、自然科学的な気風も持っています」と設置時からの伝統につい

て述べている。人間に関してウチ（心理学）とソト（社会学）の両面からアプローチしようとするのが、専修大学人間科学部の基本コンセプトとなった。

実証性を重んじるために、両学科ともパソコンを利用した教育が低学年に必修となっており、学部設置に際しては各学科専用のパソコンルームが用意された。さらに、少人数教育という特徴を生かしてそれぞれ「心理学実験」「社会調査実習」が必修科目として開設されており、実証的なトレーニングが施されている。つまり専修大学では「人間」を実証的に「科学」する学部として定義されたのである。

しかしながらここでいう「実証」には、自然科学に範を求める研究方法だけでなく、人間や社会の現場に即ながら観察し対話しながら事実をつかみ取る実証研究も含まれている。心理学科では「実験系」と「臨床系」の、社会学科では「質的調査」と「量的調査」のバランスが重視されてきた。これらは両学科にとっての両輪である。

世界の動きに合わせて、現在文部科学省は「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム」の推進に努めている。「数理」や「データサイエンス」というと数量化されたデータをいかに扱うのかということに関心が向けられることが多い。しかしそれよりも重要なことは、心や社会が織りなすさまざまな事象への洞察から、なにを研究すべき課題として取り上げ、分析に足るデータを紡ぎだしていくことこそが重要なのではないだろうか。

人間という総合的な対象に科学的な分析を加えるために、心理学と社会学の両方向から迫るのが専修大学の人間科学部である。養老孟司氏は、人間科学部の正体は複数の専門家の集合と断じたが、専門的なディシプリンを持たない学問分野は成立できないであろう。むしろ分野横断的なビジョンをいかに設定するのかという点にこそ、人間についての総合的な科学は成立するのではないだろうか。

参考文献・資料

養老孟司『人間科学』筑摩書房 2002

嶋根克己、大矢根淳、樋口博美「社会学教育を変えた調査実習」『調査と社会』No.2 社会調査協会 2009

大久保街亜「心理学科 50 年史」、宇都栄子「専修大学における社会学教育」『専修大学文学部 50 年小史』同編纂委員会 2017

文部科学省「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」（2022 年 11 月 24 日閲覧）

全国人間科学系部局連携ネットワーク事務局「全国人間科学系部局連携ネットワークアンケート調査報告書」2022

大学で人間科学を学ぶということ

武蔵野大学人間科学部　辻　惠介

Ⅰ　人間科学科か心理学科か

武蔵野大学は都心にある総合大学で、人間科学科のキャンパスは、お台場にある。ビッグサイトが至近にあり、休日はカラフルな髪をしてアニメから抜け出してきたような人々が大学の前を闊歩していることがあるし、ディズニーワールドも程近いため、出校時には、ネズミの耳を付けて甘いポップコーンの香りを漂わせた人混みの中を移動することになる。ただ、そんな立地でも、単科の女子大が前身の仏教系大学のためか、校風は比較的おとなしめである。ことに人間科学科は、まじめで堅実だが、自己評価が低く、高望みをしない学生が多い。もっとも、これは最近のわが国の大学生全般に言えることかも知れないが。

武蔵野大学の人間科学科は、哲学・倫理学、仏教学、社会学、社会心理学、自然人類学など多様な分野の教員を擁するが、大学院の臨床心理学コースに接続しているため、心理学、とくに臨床心理学を専門とする教員が多数派で、心理学的な色彩が強いのが特徴である。そのため、公認心理師・臨床心理士を目指す高校生も少なからず入学してくるが、漠然と人のこころに関心があるものの、将来の進路を決めかねているという新入生も大勢いる。この後者の新入生たちは、従来、好況時にはモラトリアム志向で人間科学科を志向し、不況時には実学志向で心理学科を志向していたように思うが、最近は景気の良し悪しに関わらず、人間科学科が安定した人気を集めているように思える。それだけ受験生のモラトリアム志向が強まっているのだろう。

それに、前者の新入生にしても、心理職を志したきっかけを尋ねると、自身が小中高の間にいじめに遭ったり不登校になったりしてスクールカウンセラーに助けられ、自分もそのときのスクールカウンセラーのようになりたいと思ったからと答える者が一定数いる。スクールカウンセラーにとっては、若者の目標になることは仕事冥利に尽きるかも知れないし、辛い体験を乗り越えて優れた心理職になる者がいるのも確かだが、辛い体験をした者がすべて心理職に就ける訳ではない。心理職には打たれ強さも相応に必要で、「タフじゃなくては生きていけない。やさしくなくては、生きている資格はない」のはロサンゼルス市の私立探偵だ

けではない。かくして、心理職を志して入学しつつ、大学生活を送る中で、どうやら自分が就きたいのは心理職ではなさそうだと気づき、他の進路――例えば地方自治体や一般企業への就職――に方向転換する学生も多い。この場合も、大学生活がモラトリアムの期間としての意味を持つことになろう。

Ⅱ　人間科学のリベラルアーツ的側面

人生６０年時代から人生９０年時代に移行し、青年期と成人期の区切りも２０歳から３０歳へと間延びしたので、大学生の時期がモラトリアムの期間に飲み込まれるのは当然と言えば当然である。大学の側でもこれを好機と捉え、高校生にモラトリアムを勧めることになる。――この多様化・複雑化した世の中で、高校生を相手に、将来就きたい職業をイメージしろというのは無理があるよね。漠然と人のこころに関心があるのなら人間科学科においでよ。大学で勉強しているうちに、将来やりたいことが見えてくるかも知れないよ――。筆者も、オープンキャンパスや高校生相手の模擬授業の際に、幾度となくこの甘言を囁いてきた。

人間科学には、人間への深い関心に根差したリベラルアーツとしての側面がある。そして、学問領域が拡大の一途を辿る現代社会において、リベラルアーツ的に学際的な学修をするための労力は相当なものである。モラトリアム志向で大学生になった後、膨大な学修をして多様な学問領域を自分なりに俯瞰できるようになるのは、難関大学の中でも優秀な、一部の学生に過ぎないだろう。ましてや、かつてのように大学生活の前半を一般教養の習得に充て、後半になってから一気に専門性の高い学修をする（つまり真のリベラルアーツを極める）ことができる者は、本当にわずかだろう。本学のような中堅私立大学に入学してきた学力層の学生たちに、この作業をさせるのは酷だし、現実的ではない。リベラルアーツとは高等花嫁修業的な教養を身につけさせることだと割り切ってしまえば可能かも知れないが、これはジェンダー平等が重視される今の時代にそぐうまい。

Ⅲ　中堅私立大学で人間科学を学ぶことの意味

社会状況が急激に変化する現在、十年後に衰退していない職業を占うのは至難の業である。これは職業のみならず、学問分野とてそうだろう。しかし、われわれ自身が人間である以上、世の中から人間に対する関心がなくなるはずはなく、人間科学の活路は必ず開けるはずである。問題は、一部の優秀な知的エリートではなく、その他大勢の一般的・平均的な学生が、社会に出る準備期間としての大学時代に、人間とはなにかという恒久的な問いに向かい合うことが許され続けるだろうかというところにある。本学のような中堅私立大学では、卒業後も人間とはなにかと問い続け、そうすることを職業にできる者は少数派である。大半の学生は、大学時代に学んだことと、直接的には関係のない職業に就くことになる。その場合、大学時代の学修は、人生に潤いを与えるだろうが、社会に出てから役に立つかとなると、なかなか微妙である。

ただ、一般的・平均的な市民が、人間とはなにかという問いに向かい合わず、人間について考えることなく過ごす社会とはどんなものだろうと考えたとき、そこに思い浮かぶのは、人間性を剥奪され、脱人格化された人々が蠢くディストピアでしかない。本学の人間科学科には、やや優柔不断で引っ込み思案な学生が少なくないので、その学生たちが就職活動や大学院進学の受験勉強の際に出遅れがちになる姿を見ているとやきもきするが、そうした学生たちが幸せに生きて行けるような世の中を残してやれたらという気もしている。

Ⅳ　人間科学系部局における入学前教育・初年次教育の重要性

ことの善悪は別として、就職活動の実質的な開始時期は、どんどん前倒しされている。就職を意識する時期は早ければ早い方がよく、周囲より一足先に就職活動を始めた学生が希望の企業から内定をもらえる傾向があるのは明らかである。これは就職に限らず、大学院進学の場合も同じである。近年は、学生のモラトリアム志向と、公認心理師や臨床心理士などの資格を取得するためには修士課程で学ぶ必要があることが相まって、本学の人間科学科でも大学院進学希望者が増加している。ただ、中堅私立大学の学生の学力水準では、大学院入試に合格するためにも、大学院での学修についていくためにも、大学生活のできるだけ早い時期に、大学院進学を意識して勉強を始める必要がある。

時代の要請は、低学年の内から専門科目の学修を始めることを後押ししている。そうすることがアーリーエクスポージャー的な効果を発揮して、学生の学習意欲を高めるのも確

かである。かくして、筆者などは、前述の甘言を弄して集めた新入生に対し、入学後は手掌を返して、できるだけ早く将来の進路を決めよと檄を飛ばすことになる。今の学生は素直なので、手掌は返すためにあるのだと嘯く筆者の言葉を素直に聞き、まるで金言のように捉えて卒業していく。些か偽悪的な書き方をしたが、人間科学系部局の教職員は、多かれ少なかれ似たようなことをしているのではなかろうか。

人間科学の特徴のひとつがその学際性にある以上、人間科学を学ぶための学修量が多くなるのは当然である。本学のような中堅私立大学では、人間科学科に入学してくるほとんどの学生たちは、人間科学の学修を志しつつ、人間科学に対しては漠然としたイメージしか持っていない。そうした学生たちに、できるだけ早く人間科学の全体像を把握させ、その上で、人間科学の中でもとくにどんな分野を学びたいか考えさせて、専門性の高い学習に充分な時間を取らせることが、学修の深化のためにも、卒業後に希望の進路に進ませてやるためにも、非常に重要になってくる。

したがって、中堅私立大学の学生の学力層を踏まえれば、初年次――可能なら入学前――に、人間科学の入門的な科目を学修させ、部局の教員の専門分野を紹介して、早期にゼミに所属させるのが理想である。

Ⅴ　初年次の『人間学入門』

本学の人間科学科では、人間科学の入門的な科目として、初年次に『人間学入門』という必須科目を設けている。人間科学系部局を創設したときの名称が人間関係学科だったこともあって、なんとなく当時からの『人間学入門』という名称を使い続けているが、内容的には『人間科学入門』である。この科目はオムニバス形式で、学科の各教員が自分の専門分野の話をすることにしており、人間科学に含まれる多様な学問領域の紹介としては一定の成功を収めている。

この科目を履修することで、学生たちの中には、入学時まで存在すら知らなかった学問領域に関心を持つ者も多い。本学の人間科学科は比較的規模が大きく（各学年二百数十名）、公認心理師や臨床心理士、精神保健福祉士、言語聴覚士を始めとする多様な資格課程を抱えており、例えば心理職を志して入学してきた学生が『人間学入門』を

受講することで、精神保健福祉士や言語聴覚士などの魅力に気づくこともある。入学する前は、公認心理師や臨床心理士という資格は知っていても、精神保健福祉士や言語聴覚士などについては聞いたことがなかったという学生は意外に多い。昔と比べて人間に関わる資格が増えているので、大学に入学する時点で知らない資格があるのは、無理からぬことなのかも知れない。

ただ、この『人間学入門』が、実質的に、人間科学に包含されるさまざまな学問領域の紹介に止まっていることには、部局長として内心忸怩たる思いがあることを告白せねばなるまい。筆者も含めて、人間科学それ自体を自らの専門と標榜する教員がいないのである。言い換えれば、本学の人間科学とは、人間科学に包含される学問領域の総体ではあるが、「人間科学とはなにか」という問いに正面から答えてこなかったのである。例えば筆者の場合、専門を尋ねられると、精神医学と答えることもあれば犯罪心理学と答えることもあり、司法精神医学や精神病理学と言ったり、精神鑑定、犯罪、殺人などといったキーワードを出したりすることもあるが、人間科学が専門だと標榜することはなかった。

人間科学には多様な学問領域の総体としての側面があるため、人間科学が専門ですと標榜するのは、大風呂敷を広げるような不安が伴う。恥ずかしながら、人間科学そのものを自分なりに定義せず過ごしてきたのである。いささか弁解じみてしまうが、これはおそらく筆者に限ったことではないだろうし、本学の特殊事情でもないだろう。その意味で、全国人間科学系部局ネットワークが設立され、令和４年１２月に人間科学宣言が提唱された意義は大きい。この機会に、せめて全国の人間科学系部局の部局長だけでも、専門のひとつに「人間科学」を挙げるようにしてもよいのではなかろうか。

Ⅵ　初年次ゼミに向けての課題

人間科学の入門的な科目を受講させることとともに重要なのが、早期にゼミに所属させることだろう。本学の人間科学科でも、従前は３年次から開始していたゼミを、数年前から２年次後半に前倒ししており、現在は、初年次ゼミの実現に向けて動き始めている。ただ、ゼミを前倒しすることは、ゼミの所属学生が増えることを意味し、教員の負担増に繋がるのも確かである。人間科学系部局は、学際性ゆえに専門ごとの教員配置が広く浅くならざるを得ず、そのため（少なくとも本学では）サバティカルを取る際に教育上の穴を埋め

るのに苦労する傾向があった。これでさらにゼミの負担が増え、教育や学生指導に忙殺されるようになれば、いよいよもって研究や実践に割く時間が奪われ、そうなると活発な相互交流を謳う人間科学宣言の趣旨にも逆行しかねない。

自分がサバティカルを取る際に、他の専任教員の負担が過大になるようでは、おちおちサバティカルを取っていられないし、代役を非常勤講師に依頼するにも限界がある。多少、夢物語じみてくるかも知れないが、大学間の単位互換を今よりも活発に行えるようにし、ある専門分野の教員がサバティカルを取るときには、その教員の専門分野の科目については、近隣の他大学の授業を履修することができ、それで単位が認定されるようにできないものだろうかと夢想することがある。人間科学全体の発展のためには、大学間の交流が、今よりもっと増えることが期待される。

Ⅶ　結語

ＳＤＧｓやサステナビリティとの親和性という観点からも、これからの人類にとって、人間科学の重要性は一層増していくだろう。学生が大学で人間科学を学ぶことに着目したとき、人間科学系部局の教員が「人間科学」を専門のひとつとして標榜することと、大学間の交流を増やしていくことこそが、人間科学の発展、ひいては人類の存続に益することのようにすら思えてくる。

人間科学ネットワークへの期待：人間を多角的視点から理解し，世界の持続的発展に貢献する

島根大学人間科学部での学び

島根大学人間科学部　磯村　実

近い将来の少子高齢化社会を迎えるのにあたり、地域に暮らす人達が「その人らしく」生きていけるような社会を作ることが求められています。このような時代背景のもと、島根大学として３９年ぶりとなる新学部として 2017 年に人間科学部が設置されました。というのも、高度成長期にはモノを手に入れること、すなわち物質的な豊かさが求められてきました。しかし現代社会ではモノではなく、生活の質や精神的な豊かさが求められる時代になりました。このような時代背景から、人間が抱える問題の多様な現実を知り、その解決策を模索していこうとする人材が求められています。また地域社会に対して積極的な関心をもち、他者と協働しながら、地域社会が抱える問題の解決に主体的に取り組める人材も求められています。

本学部では、1970 年代に精神科医の Engel 氏が提唱した BPS モデル(Bio-Psycho-Social model)に則り、からだ、こころ、社会とのつながりの 3 つの視点から人間を理解しようと試みています。それぞれの視点を専門的に学ぶため、身体活動・健康科学コース、心理学コース、福祉社会コースを設置してきます。しかしこれら 3 つの視点は独立しているわけではなく相互に影響を与えつつ個々の人間を形成しています。このことから、学生は常に 3 つの視点を意識しながら人間を理解するような試みを行っています。

また学生は、大学での学びを地域社会で活かすことができるように地域実践力を身に付けていきます。学生の学びはまず教室内での理論の学びから始まります。机上の学びを身に付けて学生は地域に出かけます。そこで学生は地域社会で学びを試すことになります。この地域実践で学生達は積み重ねてきた理論の学びだけでは現実世界の問題を解決することができないことを知ることになります。地域社会での実践によって、自らに足りないところを知り、これが未知の領域や理論への知識欲を高めることにつながります。このよ

うな理論と地域実践を何度も繰り返し、学生は着実な理論と地域実践力を身に付けていきます。

入学後の学生はまず、人間科学概論において身体活動・健康科学、心理学、社会福祉学の 3 つの領域全ての基礎を学びます。また人間科学入門セミナーで大学での学びに必要とされるアカデミックスキルを学びます。ここでは学生は少人数のグループに分けられ、各グループには 3 つのコースから教員 1 名ずつがつきます。それぞれの教員は自らの研究領域に基づいた課題を設定し、学生はそれに対する演習を行うことによって、調べる、読む、書く、発表する、議論する、というスキルを身に付けていきます。

1 年生の後期に学生は各々の興味関心に沿って 3 つのコースのいずれかに配属され、それぞれの分野の専門教育が始まります。また同時に地域での学びである地域実践科目も始まります。この地域実践科目は毎学年設置され、理論と実践の往還をしていきます。

本学部の教育プログラムで特筆すべきものとして、インタラクティブ・プレゼンテーション・ミーティング、略して IPM があります。IPM は全 3 コース並びに 2 学年の学生が参加する合同学生発表会をメインイベントとするもので、下の学年の発表を上の学年の学生がファシリテートする形式にて行います。この IPM を通して異なる観点をもった人々とアイデアを交換するための「聴く」「伝える」スキルを磨き、社会の中で人と人とをつなげて問題解決していく力を身につけます。

なお、社会福祉コースでは、必要な単位を修得すれば社会福祉士と精神保健福祉士の国家試験受験資格を得ることができ、心理学コースでは公認心理師の受験資格取得に必要な大学段階での単位を取得することもできます。

このように島根大学人間科学部では 3 つのコースを持ちながらも、1 つのコースの専門的な学びだけではなく、3 つのコースの学びの相互関係を意識しながら人間に対する理解を深めていき、かつ地域実践力を身に付けることで、地域に暮らす人達がその人らしく生きていけるような社会を作ることに貢献できる人材育成を目指しています。

人間科学宣言

人間科学は、人間という存在を究明しようとする様々な学問分野で構成され、その成果は、すべての人間の尊厳と幸福に資するために用いられる。そのため、多様な人々と出会い対話を重ねる場を重視し、学問知と社会に遍在する知との交差から新たな知を紡ぎ、新しい社会を創造することを目指す。

1972 年に初めて人間科学の考究を担う学術機関が大阪大学に創設されて以来、全国各地の大学で人間科学の名のもとに大きな動きが形成されてきた。わが国の人間科学 50 周年となる節目に、人間科学がめざす未来に向けて、以下のとおり宣言する。

１． 人間科学は、多様な学問領域の創発的な発展をめざして、研究・教育・実践において活発な相互交流を行う。

１． 人間科学は、学術的専門性を狭く規定することなく、多様な人々との交流から学び、社会課題に人々とともに取り組む。

１． 人間科学は、人間の営為に関心をもつ人々を、社会を支え創造していく新たな人材として育成する。

1． 人間科学は、誰の誰に向けた取り組みなのか、そこから生まれる知は誰に属するのかといった問いを堅持する。

以上をもって、人間科学は、人類の未来に深く貢献する学問としてその固有の存在意義を追求し続ける。

2022 年 12 月 4 日

全国人間科学系部局ネットワーク加盟大学

部局長一同

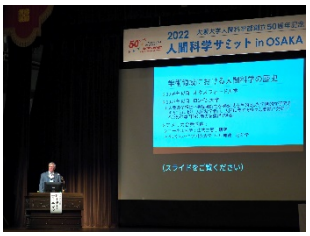
話題：大阪大学人間科学部創立 50 周年記念

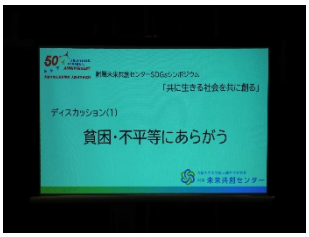
2022 人間科学サミット in OSAKA

「あつまれ、ひろがれ、人間科学」

2022 年 12 月 3 日～4 日、大阪大学人間科学部創立 50 周年を記念して、2022 人間科学サミット in OSAKA「あつまれ、ひろがれ、人間科学」が大阪市中央公会堂において開催されました。

記念式典や全国人間科学ネットワーク設立記念公開シンポジウム「つながれ人間科学」の他に、『人間科学を知ろう』というテーマで「超高齢社会：人間科学部の貢献 これまでとこれから」「気候変動時代における「人間」を問う：人新世と人間科学」「時代とともに生きる心理的支援」の 3 つの公開シンポジウム、『人間科学をひろげよう』というテーマでパネルディスカッション「共に生きる社会を共に創る：貧困、不平等、災害にあらがい住み続けられるまちづくり」の各セッションが行われました。





また、展示企画として、大阪大学人間科学部の 50 年をたどる「記憶と記録の部屋」、大阪大学人間科学研究科付属未来共創センターの活動についての展示、全国人間科学系部局連携ネットワーク参加校の展示や資料配付などが行われました。

コロナ禍の影響もありましたが、多くの学生さんをはじめとする熱意あふれる方々に参加していただきました。

情報：フォーラム人間科学を開催します

全国人間科学系部局連携ネットワーク　2023年度年次大会

フォーラム人間科学

日時
2023年12月2日（土）
13時～17時

場所
オンライン（Zoom）

開会のごあいさつ（13:00～13:05）

第１部「人間科学の最前線」（13:05～14:05）

・長谷川幸一先生（常磐大学人間科学部）
「人間科学概論（入門）」の　授業内容についての提案：
人間科学史と心理学史・社会学史・人類学史との接点について」

・仲田真理子先生（筑波大学人間系心理学域）
「当事者の視点から科学の物語を書き換える：
『発達障害の薬 はじめてガイド』の挑戦」

第２部「人間科学とは何か」（14:10～15:10）

・加藤麻樹先生（早稲田大学人間科学部eスクール）
「多様性と共生のパラダイムを構築するeスクールの学び
ー早稲田大学通信教育課程20年の実践-」

・尾崎博美先生（東洋英和女学院大学人間科学部人間科学科）
「人間を科学する／科学を人間(化)する」

ネットワーク年次総会（15:30～17:00）

＊全国人間科学系連携ネットワーク部局関係者のみ

お申し込み → こちらから　または　右のQRコードから

当日はZoomの字幕機能による文字情報保障を実施しますが、
手話通訳等の情報保障を必要とされる方は11月5日（日）までにお申し出ください。

お問い合わせ：大阪大学大学院人間科学研究科庶務係　jinka-syomu@office.osaka-u.ac.jp

編集後記

小誌は、昨年 12 月 4 日、2022 人間科学サミット in OSAKA において開催された全国人間科学系部局連携ネットワーク設立記念シンポジウムの講演者の皆様に寄稿していただいた内容を中心に、会報としてまとめたものです。

この全国人間科学系部局の交流は、今年度はフォーラム人間科学として 12 月 2 日（土）に開催されます。関連部局の先生方や学生さんはもちろん、それ以外の皆様にも参加していただければと存じます。できましたら、是非とも、多くの方に周知していただきますようお願いいたします。人間科学の意義をより深く掘り下げ、また多くの方にその必要性を知っていただく機会となれば幸いです。なお、今回はオンライン開催となりますが、次年度以降は、可能ならば対面でとの意見もあるようです。

この連携ネットワーク自体が将来、どのように発展するのか、そして、そのことが人間科学という学問の発展と方向性にどのように影響するのかについてはまだ予測することは難しいかもしれません。ただ、一歩ずつでも、こうした試みを進めることにより、人間科学の認知度を高め、一般の方、あるいは企業や受験生に人間科学という学問の幅広さと奥深さをアピールしていくことにつながると思います。さらに、現代社会や学際的な学問体系、とくに AI や遺伝工学など、技術が先走っているのではないかと思われる分野に対して提言できる存在としての人間科学を構築していく機会ともなるのではないでしょうか。

現在のところ、この「会報」は、大阪大学大学院人間科学研究科に開設予定のネットワークの web サイトに掲載し、一般公開する予定でおりますが、この「会報」も人間科学の発展とともに将来的に、役割を変えていくかもしれません。

すでに人間科学研究の学術誌を発行されている大学も多いかと思いますが、皆様の意見をお聞きした上で、この会報にも、規程などを定めた上で、査読付きの投稿論文なども掲載できるような形になれば、人間科学の発展に貢献できるのではないかと考えております。

こうした点につきまして、ご意見をいただければと存じます。（文責・中野）

会報「人間科学」 第 1 巻　2023 年 11 月 20 日発行
発行元：全国人間科学系部局連携ネットワーク

本書の掲載内容（文章、写真、画像など）の一部および全てについて、事前の許諾なく無断で複製、複写、転載、転用、編集、改変、販売などの利用を固く禁じます